

「言語ゲーム」における「堅固な岩盤」とは
どのようなものか
— L. ヴィットゲンシュタイン
『確実性の問題』を手がかりとして —

How Is “der harte Felsen” in “dem Sprachspiel” ?

— from L. Wittgenstein “Über Gewißheit” —

神尾 和寿*

Kazutoshi Kamio

ヴィットゲンシュタインの遺稿『確実性の問題』では、彼の後期の言語観である「言語ゲーム」の基盤が「世界像」として論究されている。本論では、まず、この著でのムーアのテーゼに対するヴィットゲンシュタインの批判を検討しながら、「世界像」の特徴を明らかにしていった。次いで、科学的「世界像」と宗教的「世界像」の関わりを、〈われわれ〉の包括性や〈私〉の実存を「世界像」の無根拠性と連関させながら考察した。

キーワード：言語ゲーム、世界像、〈知っている〉、〈私〉と〈われわれ〉、科学的「世界像」と宗教的「世界像」

序

ヴィットゲンシュタインの哲学活動は、一貫して言語批判にあった。ただし、周知のとおり、その言語観は、前期と後期とでは大きく異なっている。

前期の『論理哲学論考』(Tractatus logico-philosophicus)では、原子論ならびに写像理論ののっとして、論理性を本質とする理想言語が掲げられていた。それに対して、後期思想を代表する『哲学探究』(Philosophische Untersuchungen)¹⁾では、人間の生活の営みとして用いられている日常言語の総体的な活動場面が、「言語ゲーム」(Sprachspiel)として特徴づけられて支持されている。そして、その『哲学探究』には、次のような記述も見られる。

もしも私が根拠づけ (Begründung) の委細を尽くしたのであれば、いまや私は堅固な岩盤に (auf dem harten Felsen) 達しているのであり、そうして私の鋤は反り返ってしまう。その

*流通科学大学サービス産業学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

場合、私は、「ただ、まさに、このように私は振る舞うのである」と言いたくなる。(PU 217)

この箇所では、「言語ゲーム」を支えながら「言語ゲーム」を形成している最基層が問われようとしている。そして、そこには、そのような基層とはどのようなものであるのか、という問いのみならず、その基層にはどのようにして達し得るのか、それが基層に他ならないことはどのようにして証されるのか、といった発展的な問いもはらまれている。

『哲学探究』では、「一つの言語を想像する、ということは、一つ生活様式を思い浮かべる、ということに他ならない」(PU 19)と述べられているように、「言語ゲーム」の「規則」(Regel)を成す「生活様式」(Lebensform)にいわゆる「堅固な岩盤」の在り処を見定めていたと言えよう。そして、その「規則」に従うことが、その「言語ゲーム」に参入して参加者たちとともにゲームを営む、ということに他ならない。「言語において、人間は一致する。これは、意見の一致ではなく、生活様式的一致なのである」(PU 241)と、ヴィットゲンシュタインは述べている。

参加者であるわれわれにとって、固有の「規則」を有するその「言語ゲーム」が、唯一無比なるものとして現前している事実である。また、「規則」をさらにその根拠から規則づけるようなメタ規則は、認められないし、探すべきではない(哲学の悪しき伝統はその種の誤りを犯し続けてきたというのが、ヴィットゲンシュタインの見解である)。かくして、そこでは、選択の余地も理由もなくその「規則」にただ従うという仕方「振る舞う」しかないし、それが生きるということである。このようにして、人間たちは、同一の「言語ゲーム」を営みつつ「生活様式」をともにする。

絶筆となった草稿『確実性の問題』(Über Gewißheit)²⁾では、その表題からも予想されるように、こうした「堅固な岩盤」への問いが深められている。すなわち、かつて「生活様式」として示されようとした事柄が、あらためて「世界像」(Weltbild)と名づけられながら、広角的かつ徹底的に究明されようとしている³⁾。小論では、この『確実性の問題』を手がかりとして、「言語ゲーム」における「堅固な岩盤」をめぐるヴィットゲンシュタインの議論を追跡し、さらに、そのような議論から見えてくる難問を考察していきたい。

まず、『確実性の問題』の稿を起こすきっかけとなったG. W. ムーアのテーゼに対する批判の意図を通して、問題点の所在を確認しておく(I-1)。そして、〈斯く斯くしかじかである、ということ、私は知っている〉と言われる場合の、〈知っている〉や〈私〉の意味や意義の検討を通して(I-2、I-3)、「言語ゲーム」の「堅固な岩盤」たる「世界像」とはどのようなものかを明らかにしていく(I-4)。

次いで、こうした「堅固なる岩盤」に蔵されている難問を取り出し、その考察を試みていきたい。小論では、とりわけ、時間的にも空間的にも質的にも生じる諸々の「世界像」の多様性をテーマとする(II-1)。そして、科学的「世界像」と宗教的「世界像」との対比を通して、〈われわ

れ)の包括性や〈私〉の実存を「言語ゲーム」の無根拠性と連関させながら、根源的な〈宗教性〉を求めていきたい(Ⅱ-2、Ⅱ-3)。

I. 「言語ゲーム」の「堅固な岩盤」としての「世界像」

1. 問題の所在——ムーアのテーゼに対する批判——

『確実性の問題』は、「ここに一つの手がある、ということ、君が知っているのであれば、それ以外のことはすべて君の言うことを認めよう」(UG 1)というふうに、ムーアのテーゼに対する批判的な言及から始まっている。そもそもこの遺稿を執筆することになったきっかけは、アメリカのN. マルコム宅に滞在中に彼との間でなされた、ムーアの論文「常識の擁護」(A Defence of Common Sense)をめぐる議論にあった⁴⁾。

「常識の擁護」で、ムーアは、「では、私の自明の理の一覧から始めていくことにしよう。それらのいずれも、(私自身の見解では)確実に真であると私が知っている(I know)ものばかりである。この一覧表に含まれる命題(proposition)とは、次のものなどである」⁵⁾と断った上で、自明とされる事柄を挙げていく。すなわち、私の身体が存在しているということ、それはある時期に生まれてから成長や変化を遂げてきたということ、その身体は地表上に存在し続けてきたし、その地球は私の身体の誕生以前の遙か昔から存在してきたということ、また、周囲にはさまざまな事物が存在していて私の身体と距離を保ちながらも接触もしてきたということ、さらに、周囲には私の身体と同様の性質を有する多くの他者の身体が現に存在しているばかりか、私の身体の誕生以前から今は亡き無数の他者の身体が存在し続けてきたということ、そして、私はこれらの物象を知覚してこれらの物象に関する諸々の事実を認知してきたということなどが、自明とされるのである⁶⁾。また、『確実性の問題』の冒頭で言われている「ここにひとつの手がある、ということ、君が知っているのであれば」は、ムーアの別の論文「外界の証明」(Proof of an External World)での「さて、私は、たとえば、二つの人間の手が存在しているということを証明できる。どのようにしてか? それは、私の二つの手を上げて、右手で何かの仕草をしながら『ここに一つの手がある。』と言い、左手で何かの仕草をしながら『ここにもう一つの手がある。』とさらに言い添えることによって、である」⁷⁾という叙述を念頭においてのものである。

ムーアは、経験主義の立場から独断論的な観念論を論破する意図をもって、このような主張を試みている。そして、もちろん、ヴィットゲンシュタインも、ムーアと同じく(むしろ、ムーアよりもラディカルに)独断論的な観念論を批難する立場にある。すなわち、ムーアによって自明とされた先の諸々の事柄は、ヴィットゲンシュタインにとっても自明なのである。それでは、ムーアのテーゼに対するヴィットゲンシュタインの批判はどのような点にあるのだろうか。

ヴィットゲンシュタインが指摘する問題点は、ムーアのテーゼの奇矯さにある。つまり、われわれの「言語ゲーム」の営みからすれば、この種のテーゼは、ふつう生じるはずがないのである。

通常の「言語ゲーム」の営みの一環として発せられる〈斯く斯くしかじかである、ということ、私は知っている〉というテーゼの場合、その副文内容は真か偽か（すなわち、事実誤認かもしれない）の可能性にさらされており、かつ、その主文自体も真か偽か（すなわち、無知かもしれない）の可能性にさらされている。しかし、ムーアのテーゼでは、知られている事柄およびその知り方が特殊であるが故に、（私には）動かぬ事実であるが故に副文内容に偽の可能性はなく、私には（動かぬ事実）でしかないが故に主文にも偽の可能性はない。よって、ごく特異な状況を想定しないかぎり、ここでムーアによって提示されたタイプのテーゼは、「言語ゲーム」に登場し得ないのである。

ムーアのテーゼに見られるような〈斯く斯くしかじかである〉という事柄の類は、真か偽かの判定を受ける必要も機会もないどころか、「言語ゲーム」上のさまざまな諸命題（Satz）に関して真か偽かを判定する最終的な拠り所として働いている。さらに、ヴィットゲンシュタインは、同様な仕方でも明であるものとして、たとえば次のような事柄も加えていく。すなわち、規則に従って演じられている計算には間違いがないということ（この話題の本格的な初登場箇所は、UG 43）、諸科学の伝統のなかで不断の経験を通して得られてきた知識は信用するに値するという（この話題の本格的な初登場箇所は、UG 162）、私をはじめとして諸々の事物に固有の名が与えられているということ（この話題の本格的な初登場箇所は、UG 328）、などである。

「言語ゲーム」の基底には、こうした幾つかの明な事柄を語る一連の諸命題が連なっており、そこでひとつの「世界像」が形成されているのである。「ムーアが」知っている〈ことを述べている諸命題はすべて、ひとがそれに反することを信じるに足るような理由を思い浮かべ難いという性格のものばかりである。……（中略）……私の世界像には、それに反することを支持するようなものは何もない」（UG 93）、また、「それ（私の世界像）は、受け継いだ背景であり、その背景に拠って私は真か偽かを区別する」（引用文中の括弧内は、筆者による補足。）（UG 94）と、ヴィットゲンシュタインは述べている。

さらに、こうした事態は、「或る種の諸命題が疑義の対象から外されていて、そこで問いや疑義が展開するところの蝶番（Angel）のようになっている、ということに、われわれが立てる諸々の問いとわれわれの諸々の疑義は基づいている」（UG 341）、また、「ドアが回るようにしたいのなら、蝶番が固定されていなければならない」（UG 343）というふうにも喩えられている。「世界像」にあたる「蝶番」は、「言語ゲーム」にあたるドアの外部ではないが、基盤として特別なその一部を成している。そして、ドアの運転にあたって「蝶番」が要となっている一方で、「蝶番」が「蝶番」たることは、ドアの運転を通して、すなわち「言語ゲーム」の実際の営みを通して試され確認されている。

「言語ゲーム」における「堅固な岩盤」たる「世界像」とはどのようなものであるか、さらに追跡を続けたい。次節では、〈斯く斯くしかじかである、ということ、私は知っている〉と言う

場合の、〈知っている〉ということに焦点を当てて検討していく。

2. 〈知っている〉(wissen) ということ

問題となっているのは、〈斯く斯くしかじかである、ということ、私は知っている〉というタイプのテーゼである。この種のテーゼが発せられることに意義があるのは、どのような状況においてであろうか。すなわち、「言語ゲーム」の自然な営みとしてこの種のテーゼが登場する際、その必然性はどこにあるのだろうか。

前節で述べたように、そのポイントは、「言語ゲーム」の活動一般の例にもれず、そのテーゼが真偽の可能性にさらさせているという点にある。つまり、事実が〈斯く斯くしかじかではない〉にもかかわらず、その事実を〈斯く斯くしかじかである〉と誤認されることもあり得る場合である。または、〈斯く斯くしかじかである〉事実を〈知っている〉はずの自分自身をめぐって誤った自己理解がなされることもあり得る場合である。言い換えれば、前者は知識内容に関する誤りであり、後者は知識方法の自覚に関する誤りである。いずれにせよ、そうした状況があってこそ、この種のテーゼはあえて主張されたり問いかけられたりもするし、さらにそうした言明に対して、他者から同意が得られたり異議が唱えられたりもする。

そのとき、真偽の可能性にさらされているからには、〈斯く斯くしかじかである〉という副文部分は、当然、経験命題 (Erfahrungssatz) である。一方、副文でたとえば論理構造が話題とされるのならば、この種のテーゼは、無意味なものとして、事実上、起こり得ない。というのは、論理自体は、経験の如何から独立した恒真式で表されるからである⁸⁾。

しかし、ムーアが挙げたテーゼやそこにヴィットゲンシュタインが追加した事例の場合は、さらに事情が異なっている。つまり、たしかに経験命題が副文部分をなしているにもかかわらず、そこには偽の可能性は皆無であると、〈私〉としては言い切らざるを得ないのである。「斯く斯くしかじかのことを知っている」と、ムーアが言うとき、特別な検分を必要とせずになれわれが是認するような経験命題ばかりしか挙げていない。つまり、われわれの経験命題の体系のなかで或る種の論理的な役割を演じる命題に限られている」(UG 136) と、ヴィットゲンシュタインは指摘している。

この種の別格な命題に偽の可能性がないのは、そもそもこれらの命題が真か偽かの判定対象から外れているからである。それらは、逆に、「言語ゲーム」を織り成すすべての諸命題の真偽を判定する最終的な礎として働いている。そこでは、それ以上に遡ってこうした別格な命題を基礎づけるような根拠 (Grund) は、もはや求められ得ないし、必要ともされていない (vgl., UG 205, 307)。「ムーアのように、……であるということ、私には知っている、と言う人——そうした人は、その人にとってのいかほどかの確実性 (Gewißheit) の度合いを告げる。そして、重要なのは、この度合いには最大値があるということである」(UG 386) と、ヴィットゲンシュタインは述べている。

この種の経験命題は、もちろん先験的ではないが、たしかに格別なものである、といったその両面に注意をしなければならぬ。それらは、あくまで「言語ゲーム」内でその基層を成しているものであり、そこで「世界像」が形成されている。かくして、「その確信 (Überzeugung) は、ことさらに取り上げることができないほどに深く、あらゆる私の問いと答えの内に根づいているのである」(UG 103) と言われるとともに、「この基礎壁は、家屋の全体によって支えられている」(UG 248) と喩えられ、また、「彼は或ることを知っている、したがって彼の言っていることは無条件に真理であると、ムーア流にその人について語るのは、間違っているように思われる。それがただ彼の言語ゲームの不動の基盤である場合にかぎって、それは真理である」(UG 403) とも言われ得るのである。

それでは、このような特殊な内容の命題を副文として抱える主文〈私は知っている〉は、どのような事態にあるのだろうか。

この場合の副文部分の命題は「言語ゲーム」の基層を成している、ということであった。〈私は知っている〉という発言に限らず、どのような発言であれ、それは「言語ゲーム」の営みの一環に他ならない。つまり、そこでは、副文部分の命題が承知されて基層と成っている「言語ゲーム」がすでにもう活動している。となると、主文〈私は知っている〉に関して、偽の可能性は皆無である。すなわち、この場合の〈私は知っている〉という命題は、あらかじめ常に真とされているのである。ただし、常に真であるが故に、可能的に真であり得ることもない。

このような事情によって、特殊な命題である副文に関わるときの主文〈私は知っている〉という命題も、真か偽かの判定対象から外れている。〈斯く斯くしかじかである、ということ〉を〈知っている〉のか〈知っていない〉のか、という選択のレベルではなく、〈私〉は、その〈こと〉が基層として浸透している「言語ゲーム」の諸命題全体にすでにもう関わりつつ生きているのである。

ところで、ここには、より根本的な問題が潜んでいる。「言語ゲーム」において〈知っている〉という語が正常に使用されるのであれば、その命題の真偽を確かめるにあたっては、その知識の根拠や獲得方法が問われねばならない。しかし、すでに述べたように、ムーアやヴィットゲンシュタインがここで挙げている特殊な知識には根拠はなく、しかも、その知識は獲得方法の有無や如何を問わずしてただもう得られている。こうした奇妙な事態には、ムーア自身も気づいており、「常識の擁護」では、「私が思うには、われわれはみな奇妙な立場に立っている。つまり、われわれは多くのことを知っており、しかも、それらのことに関する証拠を掴んでいたに違いないということも知っているにもかかわらず、どのようにして (how) それらのことを知ったのかは知っておらず、すなわち、その証拠がどんなものであったのかは知らないのである」⁹⁾と問題化している。

このような異常な事態を鑑みて、ヴィットゲンシュタインは、この種の特殊な命題の副文に関わるには、主文の〈知っている〉という語はそもそも不適格ではないのかと、問いを投げかけて

いる。すなわち、語の使用法として、〈斯く斯くしかじかである、ということ〉を、私は知っている〉ではなくて、そのことを「信じる」(glauben)、もしくは「誓う」(schwören)と言った方がふさわしくないか、と(vgl., UG 177, 179, 180, 181)。さらに、「《こうであるということに、私は満足して(beruhigt)いる》」(UG 278)、「知識は、究極的には承認(Anerkennung)に基づいている」(UG 378)とまで、話を推し進めていく。

結局のところ、ムーアやヴィットゲンシュタインが挙げる特殊な事柄は、「言語ゲーム」内で使用される語である〈知っている〉の知識内容の類ではない。それらの特殊な事柄をもって「言語ゲーム」はすでに始まっており、それらの事柄を皆とともに承認していることで〈私〉はこの「言語ゲーム」の世界を生きている。「人間は、或る点で完全な確実性をもって真理を知るわけではない。そうではなく、完全な確実性とは、ただ人間の態度にこそ関わるのである」(UG 404)と言われるように、それは、生きていく上で関心の対象となる事柄ではなく、この世界でこのように生きることを決する態度に関わる事柄なのである。

3. 〈私〉と〈われわれ〉

本節では、〈斯く斯くしかじかである、ということ〉を、私は知っている〉と言う場合の、〈私〉に焦点を当ててさらに検討を進めていく。ここで問われるべきことは、「言語ゲーム」の基層を成す特殊な命題がどのような客観性をいかにして得ているのか、である。つまり、先回りして言えば、〈斯く斯くしかじかである、ということ〉を〈知っている〉ところの〈私〉とはただちに〈われわれ〉のことであり、という事態を追究していくことになる。

さて、ムーアやヴィットゲンシュタインが挙げるような特殊な事柄に関しては、知識対象として〈知っている〉のではなく、まだしも「信じる」とか「誓う」ことに近いのではないか、ということであった。つまり、それらは、こうした「言語ゲーム」の世界であるここで生きる、といった〈私〉の態度決定をもって承認されている事柄である。

また、それらの特殊な事柄を語る命題は、「言語ゲーム」の基層を成すが故に、それ以上にそれらの命題を基礎づける根拠にはさかのぼれない、ということでもあった。つまり、それらの命題に関しては、「言語ゲーム」内にその反証を見出すことは一切不可能である一方で、真なる命題として論証することも不可能である。

以上のことから、次のような疑義が当然のごとく生じてこよう。すなわち、それらの命題の承認は単なる〈私〉の恣意に任されているだけなのではないか、という疑いである。つまりは、そこには客観性が欠落しているのではないか、という疑いである。

たしかに、「私は、完全な確実性をもって行為する。ただし、こうした確実性は、私独自のものである」(UG 174)と言われている。しかし、この場合の「私」とはどのような者であるのかが、さらに問われていかねばならない。

それは、或る特定の立場や能力に身を置く〈私〉ではなく、ただただ今、ここで生きる〈私〉のことであると考えられる。そして、この〈今、ここ〉は、各々の者がその者自身において同質の〈私〉であるところの、無数の他の人々とともに共有され形成されている。また、こうした今、ここは、突然の発生ではなく、あくまで伝統のなかで育まれて迎えられる時点でもある (vgl., UG 275, 298)。となると、各々の〈私〉は生きてきている〈われわれ〉にただちに属しており、また逆に、生きてきている〈われわれ〉において各々の〈私〉がそのままに見出されると言える。だからこそ、「ムーアが自分は知っていると言うそれらの真理は、彼がそれを知っているのならば、一人残らずわれわれ皆がそれを知っていると行って差し支えないような真理である」(UG 100) のであり、また、「ムーアは、》私は知っている《と言う代わりに、》私にとって、……ということは確かである (fest/stehen) 《と言ってよかったのではないか。さらに、》私にとっても無数の他の人々にとっても、そのことは確かである《とも言ってよかったのではないか》(UG 116) と、ヴィットゲンシュタインは批判するのである。

たしかに、「言語ゲーム」の基層を成す命題の真理は、知性による整合的な論証にはなく、〈私〉の実存的な態度決定に懸かっていると見える。しかし、今、ここに生きる覚悟が自然に出来ているということは、同様の覚悟を持った無数の〈私〉から成る〈われわれ〉の「言語ゲーム」を共有する準備が整っているということである。そして、それは、〈私〉の意志によって、というよりも、信頼して自発的にそこに身を委ねる姿勢による「言語ゲーム」への参入である。よって、事態としては、「そのすべてのことを知っている、もしくは信じているのは、私だけではない。他の人々もそうなのだ。というよりも、彼らはそのことを信じていると、私は信じている」(UG 288) のであり、「他の人々もすべてがその通りであると信じている、つまり、知っていると言っているということを、私は固く確信して (überzeugt) いる」(UG 289) のである。

このような〈われわれ〉を特徴づけるものとして、『確實性の問題』に散見する「分別のある」(vernünftig) という特性に注目しておきたい。たとえば、「私も分別のある人間である以上、その点に関して何の疑いもない——ただそういうだけのことだ——」(UG 219)、「けれども、こうした仕方では二本の手があると信じているのは私だけではなくて、分別のある者ならば誰もがそう信じている」(UG 252)、「> 分別のある〈人間ならば誰もがこのように行為する」(UG 254) などとされている。

ここで述べられている「分別のある」ということを、概念を操る知性的な自我のように狭く捉えてはなるまい。それは、いわば人間という特殊な動物に共通する原初的な本能のようなものであると言ってよい。もしも前者のタイプの「分別」を判定基準とするならば、ムーアやヴィットゲンシュタインが挙げるような命題にはたしかに客観的な根拠はない。一方、ヴィットゲンシュタインは、後者の原初的な「分別」を判定基準として想定し、同じ「根拠」という語にその判定基準に即した異なる意味を持たせて¹⁰⁾、次のように指摘する。すなわち、「》私の確信 (Sicherheit)

に対して、動かすべからざる根拠が私にはある。《これらの根拠が、その確信を客観的なものにしてている》(UG 270)、さらに続けて、「或ることに対して何が納得できる根拠であるのかは、私が決定することではない」(UG 271)と。

前者の場合は、「根拠」とは、基礎づけられるものを超えてその外に存するものである。そうした図式に基づけば、たとえば、「言語ゲームは、基礎づけられていない。それは、理性的で (vernünftig)¹¹⁾ はない (かといって、非理性的でもない。)。それは、そこにある——われわれの生活と同様に」(引用文中の注番号は、筆者によるもの。)(UG 559)と言われ得る。一方、後者の場合は、「根拠」と呼ばれるものは、各々の〈私〉に具わっていて〈われわれ〉へと通じている「分別」を頼りとして、「言語ゲーム」の基層を成す命題自身それだけをもって充足している。

4. 「世界像」の特徴

ここで、以上の追跡をふまえて、「世界像」とはどのようなものであるのかをまとめておきたい。また同時に、多少の補足を施しながらその特徴を確認することで、次章での考察の準備としたい。

たとえば〈これは私の手である、ということ、私は知っている〉といった類のテーゼが奇妙に感じられるという、その理由の究明を通して、或る種の特種な諸命題が「言語ゲーム」の基層を成していることが明らかになってきた。それらの命題は、基層であるが故に、それ自身に対する根拠を持たぬままに、参加者である〈われわれ〉が共有する「分別」に承認されてあらゆる命題に反映されている。「われわれが何かを信じ始めるとき、信じられるのは、個別の命題ではなく、諸命題の全体系である」(UG 141)、また、「私が固守しているのは、一つの命題ではなく、一つの諸命題の巢である」(UG 225)と、ヴィットゲンシュタインは指摘している。このようにして、一群の特種な諸命題が他なるものによって真とされぬままに自ら真となって、「言語ゲーム」が起こっているのである。それらの命題は、経験命題としてあくまで「言語ゲーム」の内にあるのだが、その特殊性故に、最内奥に位置しており論理的な役割も担っている。

そして同時に、この世界での生活の営みとして繰り上げられる「言語ゲーム」の基層を成すこれらの特種な諸命題をもって、あらかじめ「世界像」が構成されている。それは、「言語ゲーム」内のあらゆる命題に対する「言語ゲーム」の基層を成す特種な命題といった関係とパラレルに捉えられ、あらゆる世界知識の構築を限定して準備するところの、「信念」(Glaube)としての世界の基本枠と言えよう。「私は、一つの世界像を持っている。それは、真であるというのか、それとも偽であるというのか。何よりもまず、その世界像が、あらゆる私の探求や主張の基体 (Substrat) なのである」(UG 162)と、ヴィットゲンシュタインは述べている。

さて、ここでまず、以下の三点にとりわけ注目しておきたい。

第一点として、特種な諸命題はそれ自身の根拠は持たない、という点である。すなわち、「世界像」は、この世界での言語生活の礎でありつつ、それ自身は深淵を漂っている。第二点として、

特殊な諸命題は、「言語ゲーム」の外部ではなく、その基層として「言語ゲーム」の体系全体に浸透して働いている、という点である。すなわち、「世界像」は、経験とは別次元の先験的なものではなく、あえて意識されたり口に出されたりする必要や機会もないまま、日々の生活世界の深層で繰り返し確認されているものである。

そして、第三点として、〈われわれ〉の「分別」が特殊な諸命題を承認するという場合、その〈われわれ〉とはどのくらいの広がりを持っており、その「分別」にはどのくらいの深みがあるのか、という問題点である。〈われわれ〉の「分別」による承認がこの具体的な「言語ゲーム」の開始を決しているわけだから、現実には、それらの広がりや深みはこの「言語ゲーム」に対して特有なものであると言える。しかし、可能性として、〈われわれ〉が広がり得て「分別」が深まり得るといふ豊かさも、そこにははさまれてはいないだろうか。もしもまったくはさまれていないのであれば、この「世界像」は変わりようがない。たしかに、変わりようがないとしか思えない「信念」をもって、この特定の「世界像」が礎とされてこの「言語ゲーム」を営みつつこの世界を生活しているのが、現実である。

しかし、簡単に発展的とは言えないまでも、事実として、「世界像」は可変的である。「一方で、言語ゲームは、時とともに変わる」(UG 256)と、ヴィットゲンシュタインは断言している。というのは、特定の「世界像」を礎として展開されていく世界知識のなかで、その「世界像」の礎たる資格が絶えず確認し返されるからである。こうした相互連関を経ながら自然に発生する「世界像」の形成をめぐる調整を、ヴィットゲンシュタインは、「経験命題の形式を持つ幾つかの命題が固まって、固まらずに流動する経験命題のための導管として機能する。そして、流動する命題が固まるようになり固まっている命題が流動するようになりたりすることで、こうした関係は時とともに変わる」(UG 96)とか、「思想の河床がずれてゆくこともあり得る。しかし、河床のなかで流れる水の動きと河床自身がずれてゆくことを、私は区別する。もっとも、両者の間にははっきりとした境界線はないのだが」(UG 97)というふうに喩えている。

その礎となっている「世界像」はもとより、そこで繰り返し上げられている「言語ゲーム」にのっとった世界知識は、どのようなものであれ、何らかの時代的制約や文化的制約を受けている。しかも、そこでは、自分自身のそうした制約を意識化して相対的に問題化する機会や必要を持たぬほどまでに絶対的となっている信念が、必要十分条件となっている。こうした特徴を、注目すべき第四点として数えておきたい。

Ⅱ. 「世界像」をめぐる考察

1. 「世界像」の多様性

前節で第四の特徴点として強調したように、「世界像」は、伝統的なものである。すなわち、「世界像」は、個人によるオリジナルな発想ではなく、同一の時代的制約ならびに文化的制約をとも

にする〈われわれ〉が引き継いできているものである。たしかに、「われわれはそのことを絶対的に確信して (sicher) いる、とは、ひとりひとりにとってそのことが確実となって (gewiß) いる、ということだけではなく、科学と教育によって結ばれている共同体 (Gemeinschaft) にわれわれが属している、ということなのである」(UG 298) と、ヴィットゲンシュタインは述べている。

それでは、『確実性の問題』を著したヴィットゲンシュタイン自身もその一員となっている〈われわれ〉とは、時代的に、また、文化的にどのような者たちなのであろうか。それは、「教育」を通して「科学」精神が鍛えられているところの、現代の西洋人である¹²⁾。

そのように定義可能な「世界像」の輪郭は、ムーアやヴィットゲンシュタインが挙げたところの「言語ゲーム」の基層を成す特殊な諸命題の具体的内容を追っていけば、自ずから現われてくる。I-1で概観したそれらの内容を総括してみれば、その「世界像」の骨格は、次のようにまとめられよう。

すなわち、——時間は持続している。空間は延長している。時空上の感覚的所与は基本的に信用し得る。時空を貫いて〈私〉は自意識を保持している。時空を貫いて各事物はアイデンティティを保持している。時空を貫いて〈私〉をはじめとした各事物は命名によって特定され得ている。〈われわれ〉は遥かなる祖先から来たっている。〈われわれ〉は地表上の成層圏で活動している。数学的明晰さや論理的明晰さは基本的に信用し得る。〈われわれ〉人類が経験を通して学習してきた自然現象の規則性は基本的に信用し得る。——となろう。そして、相属しているこのような諸命題から成る骨格に、さらに、深くあるいは比較的浅くさまざまな具体的な肉付けが為されて、現代の西洋人に特有な「世界像」が定着している。そして、こうした「世界像」は、基本的に、西洋から発している科学技術文明が支配的な現代の日本を生きている筆者にとってのものである。小論では、この種の「世界像」を、科学的「世界像」と呼んでみよう。

前章で辿ってきたように、これらの特殊な内容の命題を副文とした〈斯く斯くしかじかである、ということ、私は知っている〉といった発言は、「言語ゲーム」内にふつう現われることはない。しかし、ふつうでない状況も起こり得る。それは、「言語ゲーム」自体の完結した自然な営みがもはや許されなくなっている状況である。つまり、その「言語ゲーム」がそれとは異なる別の「言語ゲーム」に遭遇して、自身の「言語ゲーム」全体がどのような「世界像」を礎としているゲームであるのかを、ゲームの外に向かって示さねばならない、といった状況である。

たとえば、「次のような場合を思い浮かべることができそうである。すなわち、ムーアが、野蛮な未開民族に捉えられて、大地と月の間のどこかからやって来たのではないかと疑いをかけられる、といった場合である。そこで、ムーアは、……ということを私は知っている、彼らに述べるだろうが、そうした確信に対する根拠を彼らに示すことはできない。何故なら、彼らは、人間の飛行能力に関して空想的な思いを抱いており、物理学については何も知らないからである」(UG 264) といった場面を、ヴィットゲンシュタインは想定してみせている。〈彼ら〉の「世界像」は、

非科学的である。その代わりに、因果関係の誤った認識に基づいて、或る特定の自然現象を結果として引き起こすその原因として、呪術の類の威力を盲信している。小論では、この種の「世界像」を、宗教的「世界像」Aと呼んでみよう。

さらに、ヴィットゲンシュタインは、次のような場面も提示してみせる。たとえば、「もちろん、私は、どんな人間にも二人の人間である両親がいると、信じている。しかし、カトリック信者は、イエスには一人の人間である母親しかいなかったと、信じている。そうして、両親のいない人間もいると信じていて、そのことに対する一切の反証を信じようとしないうようなカトリック信者も、なかにはいるかもしれない。カトリック信者は、また、パン状のもの（Oblate）が或る状況下ではその本質をまったく変えてしまうと信じていながらも、同時に、すべての明白な事実がその反対のことを証していると信じている。だから、もしもムーアが《これはワインであって血ではない、ということ》、私を知っている《と言ったとすると、カトリック信者は、彼に反論することだろう》（UG 239）、また、「とても明敏で教養のある人々が、聖書の創造物語を信じている。そして、また別の人々は、そうした創造物語を疑いようのない虚偽と見なしている。しかも、後者の人々はその根拠としているものは、前者の人々にとってもよく知られていることなのである」（UG 336）、といった状況である。この場合の〈彼ら〉は、科学とは無縁の未開民族ではなく、たしかに科学にも通じている現代の西洋人である。しかし、そのようにありながらも、〈彼ら〉は、何よりもまず、キリスト教で啓示されている「世界像」を礎とする「言語ゲーム」の世界を生きているのである。小論では、この種の「世界像」を、宗教的「世界像」Bと呼んでみよう。

このように異なる「世界像」を礎とする「言語ゲーム」の間では、どのようなことが起こり得るのか、または、起こるべきなのだろうか。

2. 科学的「世界像」と宗教的「世界像」¹³⁾

まずは、科学的「世界像」と宗教的「世界像」Aとが遭遇する状況から考察していってみよう。

そこでは、〈われわれ〉は、〈われわれ〉にとってそれ以外には信じようがない科学的「世界像」の正当性を、〈彼ら〉が盲信している（としか思いようがない）宗教的「世界像」Aの正当性に競わせていくことになるだろう。すなわち、それは、〈われわれ〉の「言語ゲーム」内の諸命題が真であることの根拠をゲーム内の他の諸命題に求めつつ、「言語ゲーム」の体系全体の整合性を主張しようとする試みである。また、そこでは、それと同様の正当な手続きが取れないことを暴き出すことで〈彼ら〉の「言語ゲーム」の体系の不整合性を指摘しようとする作業も、同時進行しよう。

しかし、「かつて人間たちは、自分で雨を降らせられると信じていた。世界は自分とともに始まったと信じ込んでいる王様がいても、おかしくはあるまい。そこで、ムーアとこの王様が出会って議論をするとして、ムーアは、自分の信念を正しいものとして実際に証明してみせられるだろう

か」(UG 92)と疑われているように、こうした試みには限界があると、ヴィットゲンシュタインは考えている。というのは、どの命題にしても単独で存立しているわけではなく、すべての命題が関連し合っており、その体系全体が自らの礎である「世界像」を指し示しているからである。ヴィットゲンシュタインは、先の引用文に続けて、「ムーアが自分のものの見方 (Anschauung) へ王様を転向させる (bekehren) ことはできない、とまでは言わない。けれども、それは、特別な仕方での転向であるはずだ。つまり、王様は、世界を別なふうに見なすようにされよう」(UG 92)と述べている。

命題をもって論証を重ねながら、議論は、そうした「言語ゲーム」の基層を成す特殊な諸命題へ必然的に集約していく。そして、すべての議論がそこから現われそこへと戻っていくところの、そこは、もはや論証の対象とはならない。そこは、〈われわれ〉にしても〈彼ら〉にしても、根拠を持たない「世界像」の信念である。

異なる誤った信念を抱いている〈彼ら〉に、〈われわれ〉と同様に正当な信念を抱かせようとする最終的な努力を、ヴィットゲンシュタインは「説得」(Überredung)と特徴づけている。「地球 (Erde) は五十年前に出来たと信じている者に対して、われわれは、地球は遥か昔からあった云々と教えることもできよう。——つまり、われわれは、彼に、われわれの世界像を与えようと努めるわけである。こうしたことは、一種の説得によっておこなわれることになるろう」(UG 262)、また、「(異なる「言語ゲーム」の参加者に対して) 諸々の根拠は示す。だが、それらの根拠は、どこまでさかのぼっていくというのか。諸々の根拠の連鎖が尽きるところで、説得がやってくる。」(引用文中の括弧内は、筆者による補足。)(UG 612)と述べられている。

そうした「説得」にあたって、論証に代わって、いわゆる「説得」力を持つポイントは何になるのだろうか。ヴィットゲンシュタインは、「世界像」の信念を転向させ得る保証となる要素として、ものの見方の「単純性」や「均整」を挙げている (vgl., UG 92)。多少の解釈を施すならば、〈彼ら〉の「世界像」に具わっているいびつさに対して、〈われわれ〉の「世界像」に具わっている健やかさや収まりの良さを示して、その優劣が〈彼ら〉の「分別」にも届くことで「説得」が成就すると、理解してよいだろう。たとえば「大地 (Erde) を地球 (Kugel) として描く像は、良い像である。何ごとについてでも、そのことは確証されるし、また、単純明瞭な像でもある」(UG 147)という叙述にしても、このような理解と釣り合っているように思える。

しかし、以上のような科学的「世界像」から宗教的「世界像」Aへの関わり方には、根本的な怖れがつきまとう。すなわち、それは、それぞれがともに良くも悪くも信念であるにもかかわらず、〈われわれ〉の信念を基準として一方的に〈彼ら〉の信念を計って処理してしまっているのではないか、という怖れである。ヴィットゲンシュタインは、こうした態度を「攻撃する」(bekämpfen)と呼び、「彼らは、物理学者に代わって神託 (Orakel) なんぞにお伺いを立てたりするのである。(だから、われわれは、彼らのことを原始的であると見なす。)—こうしたことをわれわれが」

偽 (falsch) 《と呼ぶとき、われわれは、われわれの言語ゲームをまさに拠点として、そこから彼らの言語ゲームを攻撃しているのではないか》(UG 609) と、疑問を呈している。ここでは、「互いに相容れることができない二つの原理が実際に会う場合、どちらも、相手のことを蒙昧で異端であると断じる」(UG 611) といった状態に陥ってしまっているのである。

〈彼ら〉の信念は、それ自身として尊重されるべきなのかもしれない。しかし、そうした寛容な態度は、自分の信念に対して〈われわれ〉が不正直になるということでもある。こうした難題を解くための一つの手がかりとして、〈われわれ〉とは誰かを、根本的に問い直してみたい。

〈われわれ〉の「世界像」の承認は、今、ここで生きる〈私〉の態度決定であるとともに、伝統的な背景の継承でもある。であれば、この「言語ゲーム」の世界を生きている〈われわれ〉には、このように至った「言語ゲーム」の世界を今まで、ここまで生きてきた〈われわれ〉も、何らかの仕方に加わっているはずである。こうして〈われわれ〉の内に〈彼ら〉の残影も見出されるからこそ、トラブルの解決という実務を抜きにしても、おそらく、科学的「世界像」は宗教的「世界像」A に対して無関心ではいられないのではないか。さらにそこで、その残影を制圧する仕方では〈われわれ〉が狭まるか、それともその残影も含蓄する〈われわれ〉へ広がるかで、「攻撃」か、それとも実りある「説得」かの方向性も定まっていくのではないか。

ともあれ、宗教的「世界像」A の宗教が一種の疑似科学に収まるかぎり、「説得」の道はあるだろう。というのは、それは、たしかに西洋が現代に至るまでに自ら経過してきた一つの「世界像」に他ならないからだ。そして、気がつけば、その名残は、風習やジンクスの類として、今もなお〈われわれ〉の「言語ゲーム」に彩り(彩り程度ではあるが)を添えていると言える。また一方で、〈科学信仰〉といったような表現もまかり通っている。「こうした世界像を記述する諸命題は、一種の神話学 (Mythologie) に属するものと言えよう」(UG 95) というヴィットゲンシュタインの発言も、世界知識という知の底を成す「世界像」の信のことを思っているものである。

さて、しかし、今度は科学的「世界像」と宗教的「世界像」B との遭遇ともなると、「説得」の道は困難極まる。というのは、この場合の宗教は、質として科学とは完全に別様な「ものの見方」に沿って「世界像」を形成しているからである。「説得」は、不可能どころか、そもそもその必要性すらあるのかどうかも怪しい。双方からの「攻撃」は実際に起こるだろうが、それも、たとえおぞましい事件に発展することはあっても、建設的な対決には向かわないように思える。

そして、宗教的「世界像」B は、前近代的な未開民族の「世界像」ではなく、現代の西洋人の紛れもない「世界像」の一つでもある。その「世界像」は、参加者数の割合で言えばたしかにマイナーな「世界像」ではあるが、科学的「世界像」にも宗教的「世界像」B にもともに有効な同一の尺度などは存在しないため、比較のしようもない両者の間に、優劣はない。

3. 〈私〉の実存に関わる根源的な〈宗教性〉(結語に代えて)

最後に、科学的「世界像」と宗教的「世界像」Bとの積極的な関わり合いの可能性を求めて、展望を試みておきたい。

科学的「世界像」と宗教的「世界像」Bとが対置される場合、程度の差ではなく質的に異なるため、各々の「言語ゲーム」は体系として閉じている、と見なしてよい。すなわち、諸命題の論証は、あくまで各々の「言語ゲーム」内で可能であり、また、その内ではしか可能ではない。また、その際、体系の整合性の充実度に関して、たとえば神学の成果に見られるように、宗教的「世界像」Bが科学的「世界像」に劣ると簡単には言えまい。となると、どちらの側からしても、「攻撃」は無益であり、「説得」は不毛であり、結局のところ、実質的には没交渉であるという事実しか残らないのだろうか。せいぜい、相手側からの「攻撃」に対する防御を通して、自らの「言語ゲーム」の体系の整合的構造が吟味し直されて自己確認されるくらいだろうか。

ここで、〈われわれ〉となる〈私〉の実存に注目して、別の角度から事態を捉え直してみたい。つまり、〈われわれ〉のものとしてすでに出来上がっている「言語ゲーム」の礎を成す「世界像」からではなく、そうした「言語ゲーム」に参入して〈われわれ〉にならんとする〈私〉とは何者であるのかを追究することから始めていきたい。

さて、宗教的「世界像」Bの場合、その「世界像」を組成する幾つかの特殊な命題のなかでも、〈神は実在する〉といった類の命題が、それらの中心に据えられていることには間違いあるまい。つまり、ムーアが問題化したテーゼの形式を借りれば、〈神は実在する、ということ、私は知っている〉は、宗教的「世界像」Bを礎とする「言語ゲーム」内でもっとも発せられることのないテーゼということになる。なるほど、宗教的「世界像」Bの「言語ゲーム」は、まさに〈神は実在する〉という信念を軸として営まれているわけである。

それでは、一方、科学的「世界像」の場合、その「世界像」を組成する幾つかの特殊な命題では、〈神〉に関しては、どのようなことが自明とされているのだろうか。〈神〉は、科学的「世界像」をその根底から無効にしてしまうことは大いにあり得ても、〈神〉が、科学的「世界像」に対して建設的に働くことは決してあるまい。よって、〈神〉には、それらの特殊な諸命題をもって直接的に語られねばならないような積極性は見出せられないだろう。〈神〉は、当然、肯定されないものとして、しかも、それらの特殊な諸命題とコントラストを成すいわば影のような仕方であえて言葉とならぬままに呑み込まれている。つまり、〈神〉は認められない、とは、言わずもがなのことなのである。ただし、あえてムーアが問題化したテーゼの形式を借りてその事態を表現するならば、〈神は実在しない、ということ、私は知っている〉ではなく、厳密には、〈神は実在するということ、私は知っていない、ということ、私は知っている〉となることに、注意したい。つまり、科学的「世界像」を礎とする「言語ゲーム」の世界には、たしかに〈神〉の実在を証す証拠はひとつも見出せぬが、〈神〉の実在に対する反証を見出せられるわけでもない。〈神〉

の存在を否定することで、科学的「世界像」は始まるのではなく、〈神〉の存在を肯定しないことで、それは始まっているのである。

〈神〉の存在なしで済まし得る、もしくは済ますべきである、といった信念を背後に忍ばせて、〈私〉は、科学的「世界像」の「言語ゲーム」に参入する。たしかに、このタイプのものが、現代の西洋的世界の平均的で一般的な「世界像」ではある。しかし、一方で、〈神〉は実在するといった信念が生じれば、〈私〉は、宗教的「世界像」Bの「言語ゲーム」に参入し得る。いずれの信念にしても、その外部に自らの根拠は見当たらず、かくして、各々の「言語ゲーム」ともに深淵を漂っている。何も無いということからこちらへといわば押し出されるような仕方、〈私〉は、今、ここで生きることを余儀なくされている。そこで、〈私〉は、特定の「言語ゲーム」に参入して、今、ここで生きることを受け止め返す。小論では、こうした〈私〉の実存状況の全体に、根源的な〈宗教性〉を見出したい。

〈私〉が実存しているかぎり、たとえ消極的な仕方であろうとも〈神〉の存在と何らか関わっており、また、〈神〉は実在するといった信念に〈私〉はどこまでも可能性として開かれている、という点で、それは〈宗教性〉と呼べる。また、宗教的「世界像」Bの「言語ゲーム」への参入を準備する土壌ではあっても、或る特定の宗教に向かうように制限を受けてはいない、という点で、それは根源的である。

ただし、次のような点にも注意しておきたい。

すなわち、〈われわれ〉となる以前の浮遊しているような〈私〉なるものを、ここで仮想しているのではない。すでに何らかの〈われわれ〉となっている〈私〉があらためて自分の実存を賭けて〈われわれ〉とならんとする、そのたびごとに、根源的な〈宗教性〉が働くのである。また、宗教的「世界像」Bの「言語ゲーム」への参入を、辿り着くべき最終的なゴールとしてあらかじめ想定しているわけでもない。信仰生活を前提としなくともすでに事実としてある〈宗教性〉を、ここでは見ようとしているのである。

さて、こうした〈私〉の実存としての根源的な〈宗教性〉に焦点を当てることで、そこに科学的「世界像」と宗教的「世界像」Bとの積極的な関わり合いの可能性が見えてくるのではないだろうか。それは、自問することを忘れて各々の「言語ゲーム」に安住し切っている〈われわれ〉によって、そのようにして硬直化した異なる「言語ゲーム」の間で繰り広げられ合う牽制の類ではない。どのような〈われわれ〉となるにせよ、〈われわれ〉となるにあたって、〈私〉は次の点で葛藤せざるを得ない。一つには、根拠のないままに信念を抱かざるを得ないという点での葛藤である。二つに、それ以外の信念を抱かずに或る特定の信念を抱かざるを得ないという点での葛藤である。矛盾や分裂を本質的にはらんでいるそうした〈私〉の実存をめぐる自己対話においてこそ、科学的「世界像」と宗教的「世界像」Bとの実りある関わり合いが起こってくるのではないだろうか。

小論では、『確実性の問題』に沿って論を進めてきたこともあって、科学的「世界像」と宗教的「世界像」とを対置して考察する段階に留まった。この先には、異なる諸々の宗教的「世界像」B同士の間での本格的な対話はいかに可能か、といった問題が控えている。その際にも小論での考察が有効であることを期待したいが、それだけでは済まされない難問も浮上してくるに違いない。稿をあらためて取り組んでいきたい。

引用文献、注

- 1) 『哲学的探求』(*Philosophische Untersuchungen*)は、L.Wittgenstein: *Werkausgabe Band I*, Suhrkamp, 1984 を使用した。引用箇所は、本文中に、略号 PU と通し番号をもって示している。
- 2) 『確実性の問題』(*Über Gewißheit*)は、L.Wittgenstein: *Werkausgabe Band VIII*, Suhrkamp, 1984 を使用した。引用箇所は、本文中に、略号 UG と通し番号をもって示している。
- 3) 「生活様式」という表現は、『確実性の問題』にも見られる。「……(前略)……こうした確実性を、(ひとつの)生活様式として見たい。(これは、何ともまずい表現だし、おそらく考え方もまずいのだろう。)」(UG 358)。こうした記述からしても、さしあたって「生活様式」と言われた事柄に沿いながら、さらに思考の歩みを進めてみようという姿勢がうかがわれる。
- 4) vgl., L.Wittgenstein: *Werkausgabe Band VIII*, Suhrkamp, 1984, S.115
- 5) G.E.Moore: *Philosophical Papers*, Routledge, 2010, p.32
- 6) vgl., *ibid.*, p.33f.
- 7) *ibid.*, p.145f.
- 8) たとえばもっとも基本的でシンプルなものを挙げるならば、 $A = A$ 。
- 9) G.E.Moore: *Philosophical Papers*, Routledge, 2010, p.44
- 10) 草稿とはいえ、同一の語に異なる意味を持たせる記述の流儀は、ヴィットゲンシュタインらしからぬ。読者としても躊躇を覚えるところだが、Grund という語に広がりや深みを見出していると考えたい。
- 11) ここでは、先の注と述べたことと同じ事態が、vernünftig という語をめぐっても起きている。混乱を避けるため、この箇所では「理性的な」と訳し分けてみた。
- 12) 『確実性の問題』の執筆時期は、1949～51年である。とりあえず、大きく〈現代〉と位置づけてみた。本文で次いで概観するように、もちろん、地動説に立っている。しかし、21世紀を迎えた現在、たとえば、ラジオが代表的なコミュニケーション手段とされているという点(vgl., UG 132)や人類が成層圏から出たことがないという点(この話題の本格的な初登場箇所は、UG 93)などでは、〈現代〉と呼ぶには多少の躊躇も感じる。なるほど、「世界像」は可変的である。
- 13) II-3とともに以下に続く問題に関しては、星川啓彦:『言語ゲームとしての宗教』(勁草書房、1997)から大いに示唆を受けた(とくに、220頁以下)。
相対主義的立場から異なる「世界像」の存在を捉えた上で、さらにそこでの積極的な関わり合いの可能性を探る、という点では、星川の議論と小論は方向性を同じくしている。ただし、星川の議論では主として異なる宗教的「世界像」間での対話に関心を寄せておおむね〈われわれ〉の観点からのみアプローチしている、という点では、小論の主旨とはズレがある。